

## 養育者の回想評定による子どもの乳児期の気質と 幼児期の社会的行動特徴の関連 — 家庭環境変数も含めた検討 —

藤 岡 久 美 子

地域教育文化学部 地域教育学科

鈴木 飛 鳥

山形県発達障害者支援センター

(平成19年10月1日受理)

### 要 旨

本研究は、幼児を持つ母親688名に対して、回想により子どもが乳児期の頃の気質特徴（接近／回避、周期の規則性、負の反応性、敏感さ）及び母親の調律的関わり尺度への回答を求め、現在の子どもの社会的行動特徴（攻撃、がまん、引っ込み思案、社会的コンピテンス）にどのように関連しているかを、年少・年中・年長児群ごとに重回帰分析により検討した。家庭環境の諸変数（祖父母同居、出生順位、母親の就業）もあわせて検討した。その結果、どの年齢群においても攻撃及びがまんに対して負の反応性が有意に影響し、引っ込み思案に対しては接近／回避が影響していた。周期性は年齢群によって社会的行動特徴への影響のあり方が異なっていた。母親の調律的関わりは、年中児群において複数の社会的行動特徴に影響を及ぼしていた。家族構成については、わずかではあるが、年中児群において祖父同居が攻撃に正の影響を、祖母同居はがまんに負の影響を与え、年長児群において祖母同居がコンピテンスに正の影響を与えていた。

### 1. 問題と目的

気質とは、発達初期から顕在化する行動スタイルにおける個人差であり、生物学的基盤を有すると考えられている。発達心理学においては、Thomas & Chess (1963) による先駆的な研究以降、心理社会的発達における気質の影響について多くの研究がなされてきた。最近では、神経生理学の発展に伴い、それまでは概念的であった気質の生物学的基盤について、実証的な研究がなされつつあり、気質モデルの検討は今また盛んになされている (Rothbart & Bates, 1998)。

#### 【気質の測定尺度】

Thomas & Chess は母親への面接や乳幼児の観察など臨床的研究により、気質の9次元モデルを提唱した。9次元は、活動水準、周期の規則性、接近／回避、順応性、反応強度、敏感さ、気分の質、気の散りやすさ、及び、注意の持続と固執性である。後の研究者はこれに基づいて気質尺度の作成を試みた。例えば、Careyらは乳児用の気質尺度、RITQ (Revised Infant Temperament Questionnaire; Carey & McDevitt, 1978) と1～3歳(トド

ラー期)用のTTS(Toddler Temperament Scale; Fullard, McDevitt, & Carey, 1984)を作成している。RothbartらによるIBQ-R(Garstein & Rothbart, 2003)など、他の理論背景に基づいた気質尺度も作成されている。最近では、より少ない次元が適切に気質の構造を表すという考え方が共通になってきており(Sanson et al., 2002)、いくつかの気質次元を、反応性あるいは負の感情特性(いらだち易さ)、自己制御(注意や感情プロセスにおける意図的コントロール)及び、接近/回避(抑制)の3次元に収束させた尺度が作成されている。

本邦においては、欧米で作成された尺度の日本語版作成も検討されているが、因子構造が再現されないことも報告されている(中川・鋤柄, 2005; 菅原ら, 1994)。そのため、臨床的活用の視点からオリジナルな気質尺度の作成も試みられている(例えば、武井ら, 2004)。

以上のような様々な尺度を用いて、乳幼児の気質のその後の発達に渡る安定性(Slabach, Morrow & Wachs, 1991)や、社会性発達等への影響が研究されている。

#### 【乳児期・トドラー期の気質のその後の発達への影響】

トドラー期の抑制(回避)傾向と幼児期の引っ込み思案傾向の間のつながりは、Kaganらを中心に多くの研究で示されている(e.g., Kagan, 1988; Reznick et al., 1986)。また、トドラー期の抑制は、児童期(8~11歳)の仲間関係における引っ込み思案に関連することも示されている(e.g., Eisenberg et al., 1998)。抑制以外の気質次元では、乳児期の注意の制御が幼児期(5~6歳)のソーシャル・スキルの24%を説明したと報告する研究もある(Paterson & Sanson, 1999)。

複数の気質次元の特徴で類型化される“扱いにくい”気質タイプと不適応行動、とりわけ攻撃性など外化する問題行動との関連についても、先行研究においてその強いつながり、予測性が示されている(e.g., Bates et al., 1991)。気質の次元別の検討では、Hagekull(1994)が、トドラー期の衝動性、活動性、ネガティブ感情性が4歳児の問題行動を予測することを示した。また、Sanson et al. (1993)は、乳児期の活動性やいらだち易さ、順応性が児童期の攻撃性に関連していることを示した。

以上のように欧米の研究では、回避と引っ込み思案、反応性(負の感情)と攻撃性の関係については、乳児期・トドラー期の気質が後の発達に影響していることが繰り返し示されている。

一方で、本邦における縦断研究は非常に限られている。特筆すべき例外として、菅原ら(1999)の11年間という長期に渡る縦断研究があげられる。その研究では、生後11年目の問題行動傾向が高い群と低い群を比較し、生後18ヶ月時の気質のうち、問題行動傾向高群は、注意の集中性と体内リズムの規則性は低く、反応強度が強い傾向が見られた。また、水野・本城(1998)は、第一子を対象に乳児期(1歳時)の気質と幼児期(3歳7ヶ月)の自己制御を検討し、実験的観察場面で自己主張が出来た子どもは、そうでない子どもに比べて、乳児期の気質的な扱いにくさが低いことを見いだした。

大規模サンプルによる縦断研究の実施の困難さから、本邦においては発達初期の気質がその後の社会的発達にどのように、またどの程度影響しているかを示すデータは十分とは言えない。例えば、乳児期・トドラー期の気質による社会的行動特徴の予測性が、同年齢集団の中で社会化されていく幼児期にわたって、どの程度変化するのかといった問題に関

しては明確になっていない。

そこで本研究では、幼児の母親を対象に、回想法により乳児期の気質の特徴の評価を求め、年少児、年中児、年長児間で、乳児期の気質の現在の社会的行動特徴に対する影響のあり方を比較することを目的とする（目的1）。この際、気質次元のうち、先行研究で後の社会性発達に対する高い予測性が示された、接近／回避、反応性、周期の規則性、敏感さを取り上げることとする。

また、社会性発達に対しては気質が影響を与えると同時に、家庭を中心とした環境要因もまた、同時的あるいは先行要因として子どもの社会性に影響を及ぼす（e.g., 菅原ら, 1999）。そこで、本研究では、乳児期の母親の関わり方を気質と同じく回想法で尋ねる。また、祖父同居、子どもの出生順位、母親の就業の有無といった家族形態に関わる変数についても、環境要因として検討する（目的2）。

## 2. 方法

**対象者** 東北地方の幼稚園及び保育園合計15園を通じて、園児の母親1404名に質問紙を配布した。回収数は942名で、有効回答835名分であった。このうち、年少（3歳児）クラス以前の保育経験がなく、父母のそろったデータのみを分析対象とした。最終的な分析対象数は688名であった。

**調査時期** 2002年10月～11月。

### 調査項目

- ①フェイスシート：子どもの年齢、性別、出生順位、同居家族（人数、続柄）、母親の就業状況の記入を求めた。対象者の属性の詳細は Table 1 に示した

Table 1 対象者の属性毎の人数の内訳

	性別		通園開始				同居祖母				母就業				出生順位			合計
	男	女	年少	年中	無し	有り	無し	有り	専業主婦	フルタイム	パートタイム	自営	不明	一人子	第一子	中間子	末子	
年少	76	77	153	90	63	80	73	68	47	29	2	7	29	49	14	61	153	
年中	141	134	175	100	163	112	144	131	131	77	53	5	9	36	101	23	115	275
年長	144	116	171	89	150	110	129	131	109	79	61	1	10	40	95	29	96	260
合計	361	327	499	189	403	285	353	335	308	203	143	8	26	105	245	66	272	688

- ②乳児期の気質：菅原ら（1994）で得られた日本語版 TTS の因子分析結果より、“接近／回避”、“周期の規則性”、“視聴覚的敏感さ”、“反応の激しさ”の4因子について、原尺度のオリジナルカテゴリーと一致している項目を6項目ずつ、計24項目用いた。子どもの“赤ちゃん時代（1歳半頃まで）”を思い出し、その頃の様子について各項目に6件法（全くあてはまらない～よくあてはまる）で回答するように教示が与えられた。

- ③乳児期の母親の調律的関わり：乳児期の母親の子どもへの関わり方を測定するため、独自に項目を作成した。この際、乳児の示した行動や情動表出上の変化を察知し、それに応答する行動を問うような内容の項目を、Stern et al.（1985）及び青木ら（1996）の情動調律の概念を参考に9項目作成した。6件法（全くあてはまらない～よくあてはまる）による回答を求めた。

④現在の社会的行動特徴：前田・片岡（1993）、東・野辺地（1992）の尺度を参考に、社会的コンピテンス、攻撃、引っ込み思案、がまんの4側面を測定する項目合計13項目を構成した。回答方法は6件法（全くあてはまらない～よくあてはまる）であった。なお、調査紙には、子どものきょうだい関係に関する尺度も添付されており、きょうだいがいる場合には回答が求められたが、本稿では分析対象としない。

### 3. 結果

#### (1) 尺度の構成

気質尺度、母親の関わり尺度、社会的行動特徴尺度毎に因子分析（主因子法）を行い、気質尺度及び社会的行動特徴尺度についてはそれぞれ4因子を、母親の調律的関わり尺度に関しては1因子を得た。負荷量等の判断により、最終的にTable 2に示した項目を採用した。それぞれの下位尺度得点は、下位尺度内の項目の得点の平均値とした。

Table 2 各尺度の項目内容及び $\alpha$ 係数

	気質
接近／回避（6項目 $\alpha = .883$ ）	
家に始めてきた客に近寄っていった	
自分の家では、知らない人がそばに来て最初から平気だった	
家の外で、初めての大人とも気軽につきあえた	
知らない大人にも、すぐに話しかけた（声をかけた）	
知らない大人に遊んでもらうときも、ニコニコしていた	
初めての場所では最初の数分間、用心深くなった *	
周期性（5項目 $\alpha = .761$ ）	
毎晩だいたい決まった時刻に眠くなった	
寢床に入ってから眠るまでの時間は一定だった	
朝、目を覚ます時刻がその日その日で1時間以上もずれた *	
昼寝したがる時刻が日によって30分以上もずれた *	
おやつを欲しがる時刻は、日によってまちまちで1時間以上もずれた *	
負の反応性（4項目 $\alpha = .803$ ）	
自分の思い通りにならないと激しく反応した（泣き叫ぶ・金切り声）	
遊びがうまくいかないと、泣いたり金切り声をあげたりした	
何か失敗した時は、強い反応を示した（泣く・じだんだ踏む）	
取り乱したり泣いたりするとき、足をバタバタさせたり腕を振り回したりした	
敏感さ（5項目 $\alpha = .700$ ）	
電話のベルやドアのチャイムが鳴ると、遊びをやめて音の鳴った方を見た	
電話のベルやドアのチャイムが鳴ると、食べるのをやめて音の鳴った方を見た	
自動車のクラクションやドアのベルが聞こえても、気にしないで絵本を見続けた	
誰かそばを通ると、遊びをやめてそちらを見た	
他の子ども達の遊んでいる声が聞こえると、していることをやめてそちらを見た	
母親の調律的関わり（6項目 $\alpha = .794$ ）	
赤ちゃんが頭を振ったり手をたたいたりする動作に合わせてまねをした	
赤ちゃんがむずがっているとき、その理由をわかってとした	
赤ちゃんが何かを指さしているとき、それが何かをわかってとした	

他の人（大人、子ども）が赤ちゃんに話しかけたりしたとき、赤ちゃんのかわりに答えた（「バイバイね」など）

赤ちゃんが機嫌がいいとき「アーアー」などのおしゃべりに合わせて、一緒に声を出したりハミングしたりした

赤ちゃんの世話をすると、よく話しかけていた。

社会的行動特徴

攻撃（3項目  $\alpha = .613$ ）

- 他の子どもの物でも、かまわず取り上げる
- 幼稚園でわざといじわるをしてしまう
- 物を分け合うことができない

がまん（3項目  $\alpha = .631$ ）

- 自分の要求が通らなかったときに、泣いたり、騒いだりする \*
- 外出先などで、だだをこねたりするのを我慢できる
- したいことを止められたときに、すぐにやめることができる

コンピテンス（3項目  $\alpha = .677$ ）

- みんなと仲良く遊ぶのが上手である
- お友達に親切で優しい
- みんなから人気がある

引っ込み思案（2項目  $\alpha = .508$ ）

- 他の子どもと話すとき、ためらったり口ごもる
- 大勢の人の前では、しりごみしてしまう

\*は逆転項目

(2) 予備分析

乳児期及び幼児期の各尺度得点について（Table 3）、年齢（学年）×性の分散分析を行ったところ、いずれの変数についても交互作用はみられなかった。攻撃及びがまんについては性の主効果が示され、男児は女児より攻撃が高く（ $F(1,626) = 8.309, p < .01$ ）、がまんが低かった（ $F(1,626) = 12.253, p < .01$ ）。また、これらについては年齢の主効果も有意であり、年少児が年中・年長児より攻撃が高く（ $F(2,626) = 9.415, p < .01$ ）、がまんが低かった（ $F(2,626) = 12.403, p < .01$ ）。がまんについては、年中<年長の間にも有意差が示された。気質の負の反応性についても年齢の主効果が有意であり、年少・年中児が年長児よりも高く評定されていた（ $F(2,626) = 5.885, p < .01$ ）。

Table 3 年齢及び性別ごとの各尺度得点の平均及びSD

		気質 接近		気質 周期		気質 負の反応性		気質 感受性		母調律関わり	
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
男	年少	3.30	1.08	3.76	0.80	3.64	0.91	4.30	0.60	4.80	0.56
	年中	3.33	1.11	3.78	0.89	3.36	0.98	4.28	0.64	4.87	0.62
	年長	3.23	1.01	3.79	0.77	3.15	0.94	4.13	0.63	4.78	0.60
	総和	3.28	1.06	3.78	0.82	3.33	0.96	4.22	0.63	4.82	0.60
女	年少	3.13	1.16	3.68	0.96	3.31	0.88	4.31	0.57	4.96	0.53
	年長	3.14	1.06	3.65	0.91	3.15	0.99	4.27	0.65	4.86	0.62

総和	3.14	1.07	3.72	0.93	3.26	0.96	4.26	0.65	4.87	0.61
総和 年少	3.22	1.12	3.72	0.89	3.47	0.91	4.31	0.58	4.89	0.55
年中	3.24	1.08	3.79	0.90	3.35	0.97	4.25	0.67	4.85	0.63
年長	3.19	1.03	3.73	0.83	3.15	0.96	4.19	0.64	4.82	0.61
総和	3.22	1.07	3.75	0.87	3.30	0.96	4.24	0.64	4.84	0.61

		攻撃性		がまん		コンピテンス		引っ込み思案	
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
男	年少	2.79	0.74	3.04	0.78	4.27	0.72	3.02	0.97
	年中	2.41	0.74	3.40	0.78	4.43	0.67	3.15	1.00
	年長	2.32	0.71	3.63	0.76	4.35	0.65	3.02	1.01
	総和	2.45	0.75	3.42	0.80	4.36	0.67	3.07	1.00
女	年少	2.55	0.79	3.45	0.78	4.23	0.74	3.30	0.98
	年中	2.22	0.78	3.61	0.89	4.37	0.68	3.13	0.92
	年長	2.17	0.72	3.73	0.89	4.42	0.65	3.04	0.99
	総和	2.28	0.78	3.62	0.87	4.36	0.68	3.13	0.96
総和	年少	2.66	0.78	3.25	0.81	4.25	0.72	3.16	0.98
	年中	2.31	0.77	3.50	0.84	4.40	0.67	3.14	0.96
	年長	2.25	0.72	3.68	0.82	4.38	0.65	3.03	1.00
	総和	2.37	0.76	3.52	0.84	4.36	0.68	3.10	0.98

出生順位（一人っ子、第一子、中間子、末子）を要因とした分散分析の結果、気質の周期性は末子が一人っ子及び第一子より高く評定され（ $F(3,679) = 11.799$ ,  $p < .01$ ）、気質の敏感さは第一子が中間子及び末子よりも高く評定されていた（ $F(3,674) = 4.414$ ,  $p < .01$ ）。Table 4に平均とSDを示した。

### (3) 重回帰分析

年齢ごとに、現在の社会性の各変数を目的変数、乳児期気質の諸変数及び家族構成（祖父同居の有無、祖母同居の有無、年上きょうだい数、年下きょうだい数）、母親の変数（就業の有無、調律的関わり尺度得点）及び、子どもの性別と月齢を説明変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。

Table 5に示されるように、どの年齢群においても攻撃及びがまんに対して負の反応性が有意に影響し、引っ込み思案に対しては接近/回避が影響していた。周期性は年齢群によって社会的行動特徴への影響のあり

Table 4 出生順位ごとの各尺度平均及びSD

気質	接近	平均	一人っ子	第一子	中間子	末子
			平均	SD	平均	SD
気質 接近		平均	3.27	3.18	3.03	3.27
		SD	1.13	1.14	1.04	0.98
気質 周期		平均	3.66	3.54	3.84	3.97
		SD	1.01	0.98	0.58	0.68
気質 負の反応性		平均	3.32	3.28	3.31	3.26
		SD	1.08	0.97	0.91	0.89
気質 敏感さ		平均	4.30	4.32	4.09	4.15
		SD	0.64	0.61	0.67	0.67
母調律的関わり		平均	4.78	4.90	4.90	4.81
		SD	0.63	0.62	0.58	0.59
攻撃性		平均	2.40	2.37	2.34	2.37
		SD	0.84	0.76	0.79	0.71
がまん		平均	3.45	3.55	3.55	3.50
		SD	0.89	0.83	0.96	0.81
コンピテンス		平均	4.27	4.39	4.25	4.38
		SD	0.63	0.69	0.81	0.65
引っ込み思案		平均	3.05	3.21	3.11	2.99
		SD	1.00	1.02	1.08	0.93



方が異なっていた。一方、敏感さは、社会的行動特徴のいずれの変数にも影響していなかった。気質全体による社会的行動特徴への説明率に注目すると、全般的に年少児群がもっとも高い傾向にある。

家庭環境の諸変数に関しては、母親の調律的関わりは年中児群において、複数の社会的行動特徴に影響を及ぼしていた。家族構成については、わずかではあるが祖父母の同居が関与していた。年中児群において祖父同居が攻撃に正の影響を、祖母同居はがまんに負の影響を与え、年長児群において祖母同居とコンピテンスに正の影響を与えていた。きょうだいの影響は示されなかった。

Table 5 年齢群ごとの重回帰分析（ステップワイズ）結果

目的変数	説明変数	年少		年中		年長			
		R2	$\beta$	R2	$\beta$	R2	$\beta$		
攻撃	気質・周期性	.103	-.226	気質・負の反応性	.073	.272	気質・負の反応性	.111	.292
	気質・負の反応性	.058	.222	母調律的関わり	.067	-.257	気質・周期性	.024	-.170
	母就業	.047	.213	祖父同居	.046	.215	性別	.022	-.149
	母調律的関わり	.036	-.192						
		(.244)		(.186)		(.157)			
がまん	気質・負の反応性	.449	-.636	気質・負の反応性	.097	-.319	気質・負の反応性	.146	-.382
	性別	.027	.169	母調律的関わり	.041	.208			
				祖母同居	.031	-.169			
				性別	.015	.121			
		(.476)		(.184)		(.146)			
引っ込み思案	気質・接近	.185	-.461	気質・接近	.090	-.290	気質・接近	.118	-.338
	母就業	.029	.174	気質・負の反応性	.019	.140	母就業	.017	-.129
		(.214)		(.109)		(.135)			
コンピテンス	気質・接近	.064	.252	母調律的関わり	.130	.345	母調律的関わり	.103	.292
				気質・周期性	.036	.184	気質・周期性	.018	.143
				気質・接近	.023	.152	祖母同居	.016	.125
		(.064)		(.189)		(.137)			

※性別（男-女）、祖父同居（無-有）、祖母同居（無-有）、母就業（無-有）はそれぞれ前者に0、後者に1の値を与えた。

#### 4. 考察

##### (1) 幼児期の社会的行動特徴に影響する乳児期の気質

先行研究で繰り返し示されている、乳児期の負の反応性と幼児期の攻撃の関連は、本研究においても、全ての年齢群で示された。ただし、説明率は全体としてそれほど大きくない。また、負の反応性はがまん、すなわち自己制御にも一貫して影響を及ぼしていた。特に年少児群においては高い説明率を示している。一方、乳児期の気質的特徴としての接近／回避と幼児期の引っ込み思案の関連も、どの年齢群でも一貫して示された。

年齢によって社会性に対する気質の影響の現れ方が異なっていたのは、社会的コンピテンスに対する接近／回避と周期性の影響であった。いずれも説明率はわずかではあるとはいえ、接近／回避の影響が年少から年中、年長にかけて減っていき、代わって周期性の影響が出てくる。このことは、幼稚園という新しい場で適応的に行動する上で、不慣れな時期は新しい刺激に対して積極的である性質が促進的に働くが、のちに身体リズムの規則正しさという別の側面が影響するようになることを示唆していると考えられる。

また、年中児群においてのみ、引っ込み思案に対して“負の反応性”が正の方向に影響を示していた。すなわち、いらだち易さが高いほど、引っ込み思案傾向が高いという関係を示唆している。年中及び年長の引っ込み思案児に対して、仮想場面を用いて対人葛藤に

においてどのような感情を感じるかを調べた Fujioka (2005) の結果では、年中では、引込み思案児群が対照群よりも怒り感情を報告し、年長ではその逆であった。このことから、結果的に仲間関係から一步退くという状態に至る子どもの内面的要因は、年中と年長では異なることが推測されたが、本研究の結果とも一致していると考えられる。

## (2) 家庭環境要因

まず、祖父母同居要因について見ていく。本研究で調査を行った地域は三世帯同居率が高いという特色があり、対象者もその祖母との同居が半数あり、祖父との同居も40%あった。祖父母の存在が孫の社会性発達にどのような影響を及ぼすのかに関しては、体系的な研究は見あたらない。本研究の結果からは、否定的な側面と肯定的な側面の両方が示唆された。すなわち、祖父の同居が年中児群の攻撃に、祖母の同居が年中児群のがまんにマイナスに働き、同時に、祖母の同居が年長児群の社会的コンピテンスに促進的に働く可能性が示唆された。ただし、本研究では、単に同居の有無だけを検討したので、影響のメカニズムについては不明である。家族の中のどのようなダイナミズムにより祖父母の存在が孫の社会性発達に影響を及ぼしているのかを明らかにするためには、詳細な検討が必要である。

次に、出生順位について述べる。重回帰分析では年下・年上きょうだい数は社会的行動特徴に対して全く影響を示さなかったし、また、出生順位群間（一人っ子、第一子、中間子、末子）でも幼児期の社会的行動特徴では差はなかった。しかし、気質評定に関しては、出生順位群間で差が見られ、気質の周期性は末子が一人っ子及び第一子より高く評定され、気質の敏感さは第一子が中間子及び末子よりも高く評定されていた。この結果については、気質評定における親のバイアスの観点から解釈できるだろう。武井ら (2006) は、養育者が質問紙で評価した子どもの気質特徴は、子どもの行動観察による気質評価と高い相関を示さず、また、保育士評定とも不一致があることなどから、養育者の気質尺度評定は、子どもの気質を“忠実に”反映するのではなく、養育者のバイアスがかかった子どもの気質特徴と捉えることが妥当であると指摘している。親が捉える気質評定のバイアスには、親の抑うつやストレスがあることが示されている (Mednick et al., 1996)。また、佐藤ら (1994) は、育児ストレスは初産婦と経産婦で異なること、すなわち第一子の場合と第二子の場合で異なるという結果を見出している。以上のことから、育児の大変さにつながる乳児の気質的敏感さは、育児に不慣れな第一子の場合に高く感じられ、扱いやすさにつながる周期の規則性は、反対に第一子の場合に低く感じられたと推測される。ただし、本研究で測定した気質の次元のうち、もっとも育児の大変さにつながる気質特徴である負の反応性に関しては、出生順位群の差は示されなかった。従って、気質次元によって、養育者の評定バイアスのかかりやすさは異なるのかもしれない。

最後に、母親変数に関しては、乳児期の母親の調律的関わりは社会的行動特徴の中でも、社会的コンピテンスに対してもっとも大きい説明率を示し、これらは、社会的コンピテンスに対する気質の説明率よりも高かった。本研究では、回想により子どもが乳児の時の母親の関わり方を、乳児の示した行動や情動表出上の変化を察知しそれに応答する行動という観点から測定したが、このような親の関わり方は、安定した愛着関係の形成に寄与すると思われる。そのような安定した愛着関係が、同年齢集団における他者とのコミュニケーション・スキルに促進的に機能したのかもしれない。



## 文献

- 青木紀久代・馬場禮子・古川真弓(1996) 母子相互作用場面における母親の調律行動 情動調律行動の成立過程 心理臨床学研究, 14, 133-140.
- Bates, J. E., Bayles, K., Bennett, D. S., Ridge, B., & Brown, M. M. (1991) Origins of externalizing behavior problems at eight years of age. In D. J. Pepler & K. H. Rubin (Eds.), *The development and treatment of childhood aggression* (pp. 93-121). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Carey, W. B. & McDevitt, S. C. (1978) Revision of Infant Temperament Questionnaire. *Pediatrics*, 61, 735-739.
- Eisenberg, N., Shepard, S. A., Fabes, R. A., Murphy, B. C., & Guthrie, I. K. (1998) Shyness and children's emotionality, regulation, and coping: Contemporaneous, longitudinal, and across-context relations. *Child Development*, 69, 767-790.
- Fujioka, K. (2005) Socio-emotional characteristics of withdrawn preschoolers: Reactions to hypothetical situations of conflict. The 9th European congress of psychology (Granada, Spain) Poster presented.
- Fullard, W., McDevitt, S. C., & Carey, W. B. (1984) Assessing temperament in one-to three-year-old children. *Journal of Pediatric Psychology*, 9, 205-217.
- Garstein, M. A., & Rothbart, M. K. (2003) Studying infant temperament via the Revised Infant Behavior Questionnaire. *Infant Behavior & Development*, 26, 64-86.
- Hagekull, B. (1994) Infant temperament and early childhood functioning: Possible relations to the five-factor model. In C. J. Halverson, Jr., G. A. Kohnstamm, & R. P. Martin (Eds.), *The developing structure of temperament and personality* (pp.227-240). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 東敦子・野辺地正之(1992) 幼児の社会的問題解決能力に関する発達の研究－けんか及び援助状況の解決と社会的コンピテンス－ 教育心理学研究, 40, 64-72.
- Kagan, J. (1988) The concept of behavioral inhibition to the unfamiliar. In J. S. Reznick (Ed.), *Perspectives on behavioral inhibition* (pp. 1-23). Chicago: University of Chicago Press.
- 前田健一・片岡美菜子(1993) 幼児の社会的地位と社会的行動特徴に関する仲間・実習生・教師アセスメント 教育心理学研究, 41, 152-160.
- Mednick, B. R., Hocevar, D., Schulsinger, C., & Baker, R. L. (1996) Personality and demographic characteristics of mothers and their ratings of their 3- to 10 year-old children's temperament. *Merrill-Palmer Quarterly*, 42, 397-417.
- 水野里恵・本城秀次(1998) 幼児の自己制御機能：乳児期と幼児期の気質との関連 発達心理学研究, 9, 131-141.
- 中川敦子・鋤柄曾根(2005) 乳児の行動の解釈における文化差は IBQ-R 日本版にどのように反映されるか 教育心理学研究, 53, 491-503.
- Paterson, G., & Sanson, A. (1999) The association of behavioural adjustment to temperament, parenting and family characteristics among 5-year-old children. *Social Development*, 8, 293-309.
- Reznick, J. S., Kagan, J., Snidman, N., Gersten, M., Baak, K., & Rosenberg, A. (1986) Inhibited and uninhibited children: A follow-up study. *Child Development*, 57, 660-680.
- Rothbart, M. K., & Bates, J. E. (1998) Temperament. In W. Damon (Series Ed.), & N. Eisenberg (Vol. Ed.), *Handbook of child psychology: Volume 3. Social, emotional and personality development*, 5<sup>th</sup> ed. (pp. 105-176). New York: Wiley.

- Sanson, A., Hemphill, S. A., & Smart, D. (2002) Temperament and social development. In P. K. Smith, C. H. Hart (Eds.), *Blackwell handbook of Childhood social development*. (pp. 97-116). MA: Blackwell Publishing.
- Sanson, A., Smart, D., Prior, M., & Oberklaid, F. (1993) Precursors of hyperactivity and aggression. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 32, 1207-1216.
- 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・鳥悟・北村俊則 (1994) 育児に関するストレスとその抑うつ重症度との関連 心理学研究, 64, 409-416.
- Slabach, E. H., Morrow, J., & Wachs, T. D. (1991) Questionnaire measurement of infant and child temperament: Current status and future directions. In J. Strelau & A. Angleitner (Eds.), *Explorations in temperament: International perspectives on theory and measurement* (pp. 205-234). New York: Plenum.
- Stern, D. N., Hofer, L., Haft, W., & Dore, J. (1985) Affect attunement: The sharing of feeling states between mother and infant by means of intermodal fluency. In M. T. Field & A. N. Fox (Eds.), *Social Perception in Infants* (pp.249-268). NJ: Ablex publishing Corporation.
- 菅原ますみ・北村俊則・戸田まり・鳥悟・佐藤達哉・向井隆代 (1999) 子どもの問題行動の発達: Externalizing な問題傾向に関する生後11年間の縦断研究から 発達心理学研究, 10, 32-45.
- 菅原ますみ・鳥悟・戸田まり・佐藤達哉・北村俊則 (1994) 乳幼児期にみられる行動特徴-日本語版 RITQ および TTS の検討- 教育心理学研究, 42, 315-323.
- 武井祐子・水子学・寺崎正治・金光義弘・笹川美奈子・大谷美幾・門田昌子 (2004) 養育者がとらえる幼児の行動様式に関する一研究 - 幼児気質質問紙作成の試み- 日本心理学会第68回退会発表論文集, 1021.
- 武井祐子・寺崎正治・門田昌子 (2006) 幼児の気質特徴が養育者の育児不安に及ぼす影響 川崎医療福祉学会誌, 16, 221-227.
- Thomas, A. & Chess, S. (1963) *Behavioral individuality in early childhood*. New York University Press.

## Summary

**Kumiko Fujioka<sup>1)</sup>, Asuka Suzuki<sup>2)</sup>:**

### **Toddler temperament through mother's recollection, family context, and early childhood social functioning**

The purpose of this study was to examine the relations among toddler temperament, family context and early childhood social functioning. 688 mothers who had children of three to five year-old answered the questionnaires, which consist of toddler temperament, mother-infant interaction style, and current social functioning of their children. Toddler temperament and mother-infant interaction style were measured through mother's recollection. Regression analyses were conducted for each age group. "Reactivity" affected aggressiveness and self-regulation for all age groups. However, the way in which "approach" and "rhythmicity" affected social competence was different among age groups. Several family contexts also affected children's social functioning.

<sup>1)</sup> The Faculty of Education, Art and Science, Yamagata University

<sup>2)</sup> Yamagata Comprehensive Rehabilitation and Education Center